

シャロム儀典写本解説

序章について

シャーマの来歴を明記することで血の正当性を示しているとされています。
同じ弟子である『シモンの福音書』には記載がないことから、
シャロムが間違いなくシャーマの娘であったこと説を補強しています。

当時は星の災禍から続く暗黒の時代であり、神の名前すら失われていたと他文献より考察できます。
神学者の中には、神の名を取り戻したことがシャーマ最大の功績という声もあります。

シャーマの旅の始まりには諸説あり、どこ出身なのか、そもそも冒頭の来歴に不明点も多く
一説によるとどこかの国の王族だったのではないかと唱える者もいます。

シャーマがアイオーンの声を聴いたと呼ばれる聖杯は、他のものと区別して大聖杯と言われており
今日に至るまで誰も見たことがありません。

また聖杯がある大穴についてはグレイベルのどこかであるといわれていますが
該当する場所はありません。

古い伝承では嵐の街エディンバラに大穴があるとの説もありますが、
そもそも嵐の街エディンバラ自体が存在の真偽を疑う幻の街であり、
有力な説ではありません。

ただ、シャーマはグレイベルを救うために旅に出たことから
大聖杯もまたグレイベルのどこかにあるのではないかと考えられています。
シャーマ教において鐘楼が聖なるものだと信じられているのは、
この説話にて鐘の音をアイオーンの声ととらえているからであり、実際に魔除けの効果があるとされています。

ラウステンでの偉業について

エルフとドワーフの諍いは今日に至るまで人間の間では有名な話です。
かつては殺し合うほどに仲が悪かった両種族をいさめたのがシャーマだといわれています。

またこの時創られた川がリーニエ川だという説がありますが、あまりにも規模が大きく
熱心なシャーマ教信者以外は信じておりません。
しかしリーニエ側の水位が年々減少傾向にあることから、
200 年後にはリーニエ川は無くなっているのではないかとされています。

シャーマはこの説話において話し合いで解決できないことは時間が解決すると説いています。
これはシャーマ教が掲げる共存のための第一歩とされ、多くの聖職者たちが実践しています。
特にあまりにも仲が悪く喧嘩が絶えない夫婦に対して村の聖職者が仲裁に入る際は
この説話をよく話します。

スルーズの偉業について

今日では当方の帝国として名高いスルーズ帝国ですが
昔はサリズンやスルーズと呼ばれグレイベルのはずれにある小国でした。
この説話があることから、スルーズ帝国はグレイベルに属する正当な国家であるという主張があります。

この説話は人を見ただ目で判断してはいけないという教訓を伝えていますが
大樹と見紛うほどのツリーフォークは今日確認されておりません。
シャーマの時代にはいたかもしれないとの説が濃厚です。

またここで登場する王の使者は当時の腐敗した政治の象徴とされており
神の御言葉を授かったシャーマへ不審を抱く者として描かれております。
またそのような無礼な存在にも声を荒げず冷静に対処する様こそ
人間の模範であると唱える神学者も多数存在します。

「仕える者の品位は即ち王の品位」という言葉は
貴族階級に属する者たちへの教訓としてもよく知られています。

レヘルの森での偉業について

レヘルの森の正確な所在は明らかとなっておりませんが
ソールス川流域にあるシャドウウッズのことではないかとの説があります。

この説話から言葉が通じぬものは人のような姿をしていても魔物であると主張する者もいます。
しかし、シャーマに倣いまずは何度かは対話を試みるべきだとの意見もあります。
神学者の中で最も意見が分かれる説話です。

またモルズバロウの救世主とは具体的に何を示すのかは定かではありません。
長い年月の中で失われたページにその答えがあるとされていますが、
今日に至るまで発見されていません。

一つだけ確かなことは、オークは恐ろしい魔物であり
対話を考える余地もなく浄化すべき対象だということです。

ウルズ王国での偉業について

シャーマの生きた時代では竜人は竜と混同されており
今では考えられないほどの差別が横行していたといわれています。
過激な竜人への差別を止めたのがシャーマだといわれていますが
竜人はシャーマ教よりも祖霊信仰の割合が高いため
熱心なシャーマ教信者からは恩知らずと思われていることも少なくありません。

また、スルーズの説話でもありましたが人を見た目で判断してはいけないという考えは
シャーマ教共通の思想でもあります。

当時のウルズでは罪をすべて竜人に擦り付ける度し難い行為が横行していたといえます。
これについては他の文献からも確証がとれており、確かなものだといわれていますが
ウルズ古王国は公の場でこれを認めたことはありません。

悪竜についても当時の被害についての文献や溶解した遺跡が残されており
紛れもない事実であったといわれています。

この説話よりシャーマ教を国教とする国ではたとえ罪を犯したとしても
自首すれば減刑されることが多く、罪を人に擦り付ければ
より多くの罰を受けることになります。

悪竜退治の偉業について

白壁山脈の頂にいた悪竜についてですが、数多の文献から確かに存在したと言われています。またシャーマの弟子たちが作ったとされる山頂へ至る道は現在も有志のシャーマ教信者によって管理され当時の姿を保っています。

この説話ではシャーマがこれまで救ってきた人々が悪竜を倒すために立ち上がり共存することの強さを説いています。ただ現在の政治状況からラウステン、スルーズ、ウルズが本当に協力していたかは定かではなく国家の正当性のために付け足された可能性も示唆されています。

前章のウルズの偉業でも出ている言葉ですが「よく話し、よく祈れ」はシャーマ教の祈りと共存を現す重要な言葉として重宝されています。

シャロムはシャーマやシモンと違い、竜の声は聞くことができなかったとされています。このことからシモンこそが正統な後継者であるという説もありますが、シャーマの望んだ祈りと共存を体現し数多くの伝承に名を残しているのはシャロムでありシャロム派がシャーマ正教と言われている所以でもあります。

この章ではシャーマ教における終末思想である大地返戻について言及されています。シャーマ教を信仰するものは皆、来たる大地返戻までにこの世界を浄化するべく活動を行っています。

三戒について

この説話ではシャーマが弟子たちに残した三戒について記されているのですがシャロム儀典写本、シモンの福音書のどちらもシャーマへ最後の問いをしたものが「私」となっています。そのため、三戒を授かったのが誰であったのが定かではなく、長年議論的になってきました。

この説話が、イエール会議にて正教会とシモン教会の断裂の決定打になったとされています。

正教では三戒の最後「私の旅を学びなさい」を聖典を読み学び取ることだとされています。

